[実践報告]

# 私の教育再生論 ～ 言葉の感化力を信じて

池上　和文

（元宮崎県立延岡星雲高等学校 校長）

## 1　はじめに

今年 2012 年の夏は「猛暑日」の続く酷暑の連続であったが，教育界はいじめ問題で揺れ続けた。どうして前途有為な若者を自殺にまで追い込んでしまうのか。現在の我が国の教育は，どこかで大きなボタンの掛け違いを犯している。冷厳なる事実を突きつけられて，誰もがそう感じながらも有効な手立てを打てないでいるのが，遺憾ながら現実である。

大人・子どもの年代に関係なく，人間性の劣化が指摘されて久しい。教育の言葉に置き換えれば，規範意識の希薄化・低下である。さらに具体的に言えば，是非善悪の区別がつかず，何をしてもその人の自由というエゴイズムの蔓延である。刻下のいじめ問題も，その延長線上にあることは論をまたない。それでは，規範意識回復のために学校は何をどうすれば良いのか。根底から人間の在り方生き方を考えさせる教育の再構築と強化であろう。

学習指導要領によれば，高等学校の道徳教育は，「人間としての在り方生き方に関する教育を学校の教育活動全体を通じて行うことにより，その充実を図る」とされている。すなわち，「各教科に関する科目，総合的な学習の時間及び特別活動のそれぞれの特質に応じて，適切な指導を行わなければならない」と。それでは校長は具体的にどう取り組むべきか。

本稿は，在り方生き方教育を念頭に，校長として私が卒業生に贈ったエッセイ集であり，すべて卒業式の日に発行される学校新聞等に掲載されたものである。教育再生を願う現在の立場から，すべての文章に追記として新たに管見を付した。

校長の役割は，学校の教育理念を通して，一人ひとりの生徒たちの魂に灯を点けることであると言うことができるが，毎日授業のある一般の先生方とは違って，その場は極めて限られているのが実際である。したがって，自分の思いを伝えるためには，入学式，卒業式の式辞，全校集会や保護者集会での講話，そして学校の出版物の巻頭言や挨拶文等，限られた機会を大切にし，全身全霊を込めて取り組むことが求められる。

私は，現職校長時代，月に１回のペースで，全校生を前に高校生の在り方生き方について熱く語る校長講話の時間を設定してきた。言わば授業を持たない校長の授業ともいうべき時間で，必ずレジュメを準備し，時には音楽等を取り入れながら具体的に話をした。

「教育は感化である」とは教職にあるものなら一度は見聞したことのある言葉であろう。教育は基本的には言葉による営為である。それでは言葉による感化力を信じて，日常の学校運営の集大成として巣立ちゆく若者に何を語りかけたか。退職して早くも４年が経過し，現在地元の私立大学で教員養成教育に携わる私にとって，言葉の感化力は，自分自身の覚悟と使命感に関わる大きな命題でもある。以下，拙文へのご批判を乞うものである。

## 2　縦軸の継承と品性の陶冶を

卒業おめでとうございます。門出の日に私は，皆さんのこれからの在り方生き方として「縦軸の継承と品性の陶冶」をお願いしたいと思います。問題を分かりやすく焦点化するために，昨秋の海外研修で視察したドイツとの比較のなかで話を進めていくことにします。

ドイツの教育は，州を単位に実施されており，州憲法で教育目標が設定されています。私たちの滞在したバイエルン州では，学校教育の目標は，児童生徒の知識，ハート（心），キャラクター（人格）を伸ばすこととされ，具体的には，神に対する畏敬の念，自己責任，相互扶助，環境保護，民主的精神，郷土愛の育成，と規定されていました。

パッサウ市で合計五つの学校を訪問しましたが，どこでも教室にはキリストの十字架が掲げてあり，根底に宗教教育があることが窺い知れました。ドイツ人は本当に実直です。訪問先の各学校では，それぞれに熱烈な歓迎と懇切丁寧な説明を受けました。情熱的な説明の背後には，自国の教育制度に対する強い自信と教職に対する矜持が感じられました。学校教師の社会的な地位は相当に高いものと思われます。「教育の質は教員の質である」と異口同音に述べた各学校長の自信と誇りに満ちた表情を今でも忘れることができません。

今回の研修中にいくつかの貴重な発見がありましたが，最も驚いたことは，ミュンヘンでもパッサウでも，街を若者が徘徊していないということです。ドイツの学校は夕方遅くまで授業をすることはありません。とっくに放課になっている時間帯でも，徘徊する若者にはついぞ遭遇しませんでした。社会は大人がつくるものだということなのでしょう。子どもが早く大人になりたいと思う社会といつまでも子どもでいたいと思う社会，この辺にも日本の教育を再考してみる視点がありそうだとしみじみ思ったことでした。

周知のように，教育の目的には個性・能力の開花という個人的な側面と文化・規範の獲得という社会的な側面があります。この二面性を最近では横軸と縦軸という言葉で説明する人もいますが，この縦軸としての文化・規範の継承という面で我が国の教育は今や大きな危機に直面しているのではないかと思われます。

ヨーロッパの街並みを歩いていると，人間が歴史的な存在であることがよく分かります。パッサウの聖ステファン大聖堂には，教会としては世界最大のパイプオルガンがありますが，滞在終盤の折からの日曜日，この教会のミサに接する幸運に恵まれました。実に荘厳な雰囲気です。中世以来伝えられてきた壁や天井の絵画は，命の意味を考えよと迫ってくるかのようです。「人間は決して自分勝手に生きているのではない。過去から未来へと続く悠久な命の流れのなかで生かされているのである」。この世のものとは思えない美しい讃美歌の音色は，私にそう告げているかのようでした。ドイツと日本の最大の違いは，教育における縦軸とそれを支える歴史と伝統の重さ，そして宗教を根底に据えた人間の品性だと痛切に感じました。

自己の価値観を絶対視する余りに他のすべてを無視してしまうような，刻下の我が国の風潮を直視するとき，「現在の日本社会に果たして縦軸は存在するのか。縦軸を喪失した社会は社会として存在し続けることができるのか」と，深刻に問わざるを得ません。

卒業生の皆さん。どうか自立の拠点としての家族や故郷をこよなく愛し，人間を生かし続ける縦軸を大切にするとともに品性を磨き続ける人であってください。
ご多幸を祈ります。（平成15年3月1日）

＜追記・管見＞　今から丁度10年前の平成14年10月，文科省と県教委の共同事業として，ドイツの教育事情を視察する研修機会を得た。校長に就任して1年目のことである。パリからミュンヘンを経由して，視察地である南ドイツの古都パッサウに10日間滞在し，合計五つの学校を訪問した。パッサウ市は風光明媚なローマ時代からの由緒ある古都である。ドナウ，イン，イルツの3河川が合流する交通の要衝でもあり，石造りの古風な家屋の立ち並ぶ街並み全体が歴史の重さを漂わせていた。

教育の最終目標は「人格の完成」であるとされるが，この研修を通じて私が最も強く感じたことは，表題にも記したように，国家や社会の「縦軸」としての歴史とそこに生きる「横軸」としての人間の品性ということであった。ヨーロッパの古都，特にローマ時代から連綿と続くパッサウ市の建造物や文物は，人間が過去から生き抜いてきた歴史的存在であることを教える教育装置ともいえるものであった。

古きものは良きものである。時代の変化に耐え抜き，今日まで存続し続けてきたものは，それ自体大きな価値を持つということができるが，簡単に過去を捨て去ろうとする風潮が強い我が国では，古いものは概して値打ちのないものとみなされやすい。しかし，果たしてそれで良いのだろうか。人間が品性を維持できるのは，歴史的存在であることを自覚するときである。人間は過去を喪失したとき，生きる意味を見失い，品性をも喪失してしまうのである。我が国の教育もドイツに倣い，もう少し積極的に歴史や伝統（「経験知」）から学ぶ姿勢を取り戻す必要があることを痛感した。

晩秋の古都で，もう一つ私が驚嘆したのは，大人と子どもの截然たる区別である。ウィークデイの午後，繁華街を徘徊したりたむろしたりする子どもたちは皆無であった。放課後のこの時間に子どもたちは一体どこにいるのか，と参加者一同等しく疑問に思った。大人の子どもに対する教育力の賜物であるに違いない。社会は大人が作るもの。子どもはまだ社会の直接の形成者ではないから，占めるべき場所を持たないということであろう。子どもの居場所は，家庭や地域であり，少なくとも繁華街ではない。これとは違って，日本では，子ども同士が一人前の消費者として繁華街を闊歩している様子は，決して珍しいことではない。なんという違いであろう。そして，日本はなんと大人と子どものけじめ無き「寛容なる許容社会」であることであろう。大人が子どもを教育する存在であるならば，教育するものと教育されるものとの区別があるのは当然のことである。「悪平等」ともいえるすべての混同がはびこる我が国では，このように考えること自体がむしろ不自然なこととされてはいないだろうか。短い滞在ではあったが，この研修を通じて，教育風土の違いをまざまざと実感したことであった。

### 3　ライ麦の苗の教え

卒業おめでとうございます。卒業は春を待つ自然の胎動に似ている，と私はずっと思ってきました。ここでいう「胎動」とは，もちろん母体内で胎児が動くことではありません。新しい動きが表面化する兆しの見えることです。大人への萌し，社会人としての萌し。その萌しが蕾となり，やがて大輪の花を咲かせてくれるであろうことを確信して贈る言葉を述べさせていただきます。

人生は昔から旅にたとえられてきました。作家の五木寛之さんは，「一歩を踏み出したら，すでに旅だ。目を上げて周囲を眺める人間は，すでに旅人である」（『百の旅 千の旅』）と述べていますが，その五木さんのいくつかの著書（エッセイ）に共通して出てくる例話があります（『大河の一滴』『人生の目的』他）。それは，広さ30センチ四方，深さ56センチの，砂の入った木の箱に植えられた，一本のライ麦の苗の話です。四か月余り水をやって育てたのち，根毛まで含めて，伸びた根の長さを測ると，なんと11,200キロメートルに達していたというのです。これはシベリア鉄道の約1.5倍の長さだそうです。

命を支えるというのは，このようにたいへんな営みである。五木さんは次のように書いています。「そうだとすれば，そこに育った，大した実もついていない，色つやもそんなに良くないであろう貧弱なライ麦の苗に対して，おまえ実が少ないじゃないかとか，背丈が低いじゃないかとか，色つやもよくないじゃないかとか，非難したり悪口を言ったりする気にはなれません。よく頑張ってそこまで伸びてきたな，よくその命を支えてきたな，とそのライ麦の根に対する讃嘆の言葉を述べるしかないような気がするのです」。そして五木さんは，人間の一生はそれぞれかけがえのない一生なのだから，人間はただ生きているだけですごいのだ，人生の目的は生きることなのだ，と言っています（『人生の目的』）。

新聞報道によれば，昨年一年間の「オレオレ詐欺」（振り込め詐欺）は6,504件，被害総額は43億1,800万円とのことです。「オレオレ詐欺」とは，子や孫を装ってお金を送金させる新たな手口の詐欺です。この例にも見られるように，最近の我が国には，何をしても「その人の自由」という誤った考えが横行しています。

「荒れる成人式」はもう過去のものになってしまったのだろうと思っていた矢先，今年も一部での常軌を逸した成人式の様子が報道されました。どうしてこれほどまでに規範意識が低下してしまったのでしょうか。理由はいろいろと錯綜しているのでしょうが，その一つは，人間が歴史的な存在だという意識が欠落しているからではないかと思われます。

奇跡に近いといっていいほどの過去からの長い「命の鎖」の一環として自分が存在しているのであり，受け継がれた命はまた次代へと伝えていかなければならないことが分かれば，ライ麦の苗が教えるごとく，今生きてここにあることに素直に感謝することができると思うのです。人間は生きているだけですごいのです。門川農業高校卒業生としての自信と誇りを持って旅立ってください。ご多幸を祈ります。（平成16年3月1日）

＜追記・管見＞　作家五木寛之氏の，仏教哲学を基礎においた人生論も様々に在り方生き方教育の素材を提供してくれて貴重である。五木氏は，ライ麦の苗を例に引いて，人間は生きているだけですごいのだと言う。確かに一つの生命としてこの世に誕生してくるまでのプロセスは，神の摂理といっていいほどに神秘的なものである。だとすれば，まず自尊感情をしっかりと育てなければならない。自尊感情のベースは，信頼である。そして，信頼を基礎にした自己有用感の自覚である。ここにおいては，乳幼児期の親の愛情が決定的に重要な意味をもつ。愛情と信頼を実感してこそ，子どもは精神の安定感を得ることができる。そしてそれはまた，子どもの活動エネルギーの源泉となるのである。

過日，小学4年生のわが子を，実母が「躾」と称してゴルフクラブで撲殺するという陰惨な事件が報道されたが，逃げることさえできなかった子どもを思うと痛惜の念でいっぱいであった。ところが，その直後，今度は二人の女児を母親が刺殺するという事件が起こった。子どもを庇護すべき親による相次ぐ殺人事件の報道に接して，世も末の感を持たれた人々も多かったに違いないと想像される。

五木氏はまた，自分を愛していない人間は他人を愛することができないと言う。まさに至言である。自分に自信と誇りを持てない人間は，他人を積極的に評価することはできない。自尊感情は，人間を歴史的存在だと認識し，過去から受け継がれてきた命のバトンを未来へと伝える存在としての自己の役割を自覚したときに，新たな光を放つものとなる。それは私的存在としての自分から公的存在としての自分への飛躍である。こう考えれば，刻下のいじめも問題も，自尊感情の欠如した結果として説明することができよう。

「認め，褒め，励ます」教育のゆるぎなき実践が，子どもの自尊感情を高め，ひいては人間尊重につながることを再認識しなければならないであろう。

## 4　「よき人生」の追求を

卒業おめでとうございます。いよいよ門出の日がやってきました。卒業は，長い間皆さんを守り育てた親の庇護から離れて自立するときです。もう甘えや責任転嫁は許されません。一人前の大人へと近づく気概と覚悟が必要です。

皆さんが最終学年を送った平成 16 年は，我が国の現状を象徴する数多くのデータが発表されました。出生率 1.29 人，児童虐待相談数 26,573 件，自殺者数 34,427 人等々。これらの数字は，日本の少子化が加速されている中で，若い親たちが子育てに自信をなくしているばかりか，生きる意欲さえ失っている人が増加しているという危機的状況の存在を意味しています。戦後 60 年を迎えた今年，元旦のある新聞は，「今，日本は，まさに国家百年の計が問われている」と指摘しております。

一方で，相次ぐ台風の襲来，新潟中越沖地震の発生，そして年末にはインドネシアスマトラ島沖地震に伴うインド洋大津波が世界を震撼させました。壊れ始めたのは人間だけではなく，今や自然も世界的な規模で牙を研いでいるかのようです。

しかし，人間の歴史を繙いてみれば，いつの時代も危機的様相を持たない時代はなかっ

たともいえるのです。「無知の知」を説いたソクラテス以来，人間はその理性を唯一の杖として危機の本質を見極め，「よき人生」を追求してきたのでした。

我が国には我が国なりの「生き方のよさ」がありました。法学者八木秀次氏（現高崎経済大学教授）に拠れば，小泉八雲ことラフカディオ・ハーンは，死せし祖先を生きているかのように扱い，どこまでも感謝と尊敬の愛情を持ち続ける日本人の死生観に羨望の思いを込めて，「死者の支配する国」と評したといいます（「死者の支配する国」『わしズム Vol.10』）。日本人の「生き方のよさ」を支えていたのは，祖先から受け継いだ命のバトンを，現在の自分を通じて将来の子孫に伝えるという「生命の連続性の自覚」でした。

何をしても「その人の自由」というところまでに個が肥大し，他を顧みない自己決定が横行する刻下の我が国において，回復すべきは「生命の連続性の自覚」だと思われます。なぜなら，「有り難い」現実を自覚するときにこそ真に感謝の心が生まれるからです。

卒業生の皆さん，今生きてここにあることに感謝し，「生き方のよさ」を追求する人であってください。ご多幸を祈ります。（平成 17 年 3 月 1 日）

＜追記・管見＞　中高女子生徒の「援助交際」が社会問題化し始めたころ，「他人に迷惑をかけなければ，何をしても“その人の自由”（自己決定権）でしょ」，という一種開き直りの言葉が世間を風靡したことがある。この「自己決定権」という言葉に基づいて自己の行動を正当化する子どもたちに対して，転倒した倫理観を説いてそれを援護する学者さえもが登場してきて，「援助交際」そのものを間違いだとして諌める大人側の適切な論理がなかなか見つからなかった。そんな中で，ある人が「魂に悪い」と言っていたのを記憶している。この論理こそ人類の教師たるソクラテスの教えであるといっていい。

学習指導要領は，高等学校の在り方生き方教育の中核的な教科として，「公民科」を位置付けている。そして公民科に属する一科目「倫理」では，「先哲の基本的な考え方を手掛かりとして，人間の存在や価値について思索を深めさせる」とされている。

教育の要諦が継承にある以上，過去の知的遺産は相続されなければならない。そうであれば，先人の叡智に学ぶことは教育の必須条件である。我々は，子どもたちに対して，先人の生きざまを現代に交錯させて語らねばならないのである。

アテネのアポロン神殿に刻まれていた「汝自身を知れ」という言葉と，「ソクラテスにまさる知者はいない」というデルフォイの神託から，ソクラテスは「無知の知」に至り，真の知を求めること（「愛知」）を哲学の出発点に据えた。自然哲学からソフィストを経由して，ここに哲学は人間の学としての地位を確立したのである。実践をともなわない知は意味がないから，ソクラテスにとっての知は単なる知識ではなく，人生を生きる知恵である。人間の徳とは，魂をすぐれたものに保ち，正しく善く生きることである。この徳の実践こそが幸福をもたらす。このように「知」と「徳」と「福」は一致するのである。

これが教科書等で概説されるソクラテスの思想の核心である。先哲ソクラテスのこの考え方を「手掛かり」にして，「魂を磨き，善美の事柄を求め，実践し続けることこそが人間

としての幸福に至る道である」と，現代の若者たちに規範意識の回復のための方向性を示すことは十分に可能ではないだろうか。「援助交際」に限らず，いじめについてもまたソクラテスに学ばねばならない。他人のものを盗んだり，隠したり，強要したり，暴行を加えたりして弱いものをいじめることは明らかに犯罪であり，不正をなすことであるから，ソクラテス流に言えば，善く生きることから外れ，確実に「魂に悪い」のである。

## 5　出会いと笑顔を大切に

3 年生諸君，卒業おめでとう。皆さんの人生の門出に臨んで，長期，短期それぞれの視点から，二つのことについて贈る言葉を述べたいと思います。

まず最初は，人と人との出会いを大切にして豊かな人生を築いて欲しいということです。私事で恐縮ですが，私が大学生活を送ったのは，昭和 40 年代，我が国が奇跡的な経済成長を達成するとともに，やがて少しずつその勢いに陰りが見え始めてきたころでした。

この学生時代に，「この出会いなくして今の私は存在しない」といっていいほどの，決定的な出会いが私を待っていました。それは，私の学問の師であると同時に人生の師でもある，恩師T教授との出会いでした。

忘れもしません。大学院に進学した年の，ある秋の日の出来事でした。ゼミ室に入室されるや窓から外を凝視されていた先生の，「マロニエの葉が散りましたね」という言葉で始まったその日のゼミは，今も鮮明に私の記憶のなかに残っています。

スピノーザ学者でありギリシア哲学者である先生は，当然のことながらラテン語にもギリシア語にも通じておられました。その日のゼミのテーマは，アメリカの哲学者の書いた英語の論文をテキストとする芸術論でしたが，黒板にはギリシア語が書かれ，音楽についてはドイツ語を，文学についてはフランス語を交えて解説される先生の鋭い眼光に接して，私はいつの間にかびっしょりと脂汗をかいていました。九州の宮崎で生まれ育った私にとっては，数ヶ国語を自在に操る「知の巨人」を目の当たりにしたのは，生まれて初めてのことだったからです。詩人でもある先生の口からは，あの有名なポール・ヴェルレーヌの詩「秋の日のヴィオロン」が，フランス語の原語で立て板に水のごとく放出されました。実は私は，学部時代からT教授のゼミ生であったのですが，弟子のひとりとなったこの秋の日に，真に知的に覚醒されたのでした。

その日以来，先生の教えは常に私の傍らにあって私の心の支えとなり，「知的な怖さと恥ずかしさを知れ」と私を激励し続けております。すでに米寿を過ぎられたのですが，今も矍鑠として学問と詩作に打ち込んでおられる恩師の姿は，今なお私の大きな灯火です。

いささか私的な話をし過ぎてしまいましたが，人生は出会いです。そして人と人との繋がりは人生の大きな財産です。「求めよ！さらば与えられん」という聖書の言葉がありますが，良い出会いをするためには，自分をよく知り，絶えず求め続けることが大切です。
よき友と，よき師と，よき伴侶と出会い，素晴らしい人生を築いてください。

次は，“Keep　Smiling!”，毎日毎日を笑顔で過ごして欲しいということです。皆さんは

東高校の校舎の壁の,「良いことがあるから笑うのではなく，笑っているから良いことがある」と書かれたポスターを覚えていますか。この言葉のとおり，良いことを考えれば良いことが起きるのです。私は，プラス思考の心の在り方を「ラッキー精神」として機会あるごとに皆さんに呼びかけてきましたが,「ラッキー精神」に繋がるのはまず笑顔です。人間関係の基礎をつくり，人生の「ツキ」を呼び込むのも笑顔です。どうか，笑顔に溢れた毎日を送ってください。そうすれば，必ず夢の実現につながります。そして最後にもう一度，“GO AHEAD WITH A SMILE!”＜笑顔で前進！＞（平成18年3月1日）

＜追記・管見＞　恩師T教授とは，法律哲学・法思想史の教授として，長年明治大学法学部で教鞭をとられた立石龍彦先生である。紆余曲折を経て，挫折の果てに大学の門に辿り着いた私にとって，明治大学とはまさに立石先生であった。教え子たちにとって先生は，卒業後も等しく，まぎれもない心の支えであったが，2008年初冬惜しまれつつ他界された。

翌2009年5月，教え子たち有志によって「偲ぶ会」がもたれ，一人一人が先生の思い出を語り合った。参加者一人一人が宝物のように大切にしてきた先生の思い出を披瀝し合うとき，学生時代の折々のシーンが走馬灯のように思い出され，会場は静かな感動に包まれた。先生の存在が教え子たちそれぞれにとっていかに強大なものであったか。言葉の感化力の実例として，そのとき紹介された立石先生の言葉で，今も私の心に残るものをいくつか記すことにする。

- 孤独を楽しもうとすれば，最高の教養が必要である。
- 幼稚園から大学まで，教員はなぜ「先生」と呼ばれるのか。それは大事なものを伝える仕事だからである。
- 物事を多面的に見よ。富士山といえば，日本一の山で，私たちは日ごろ美しい富士山の景色ばかりに接しているが，富士山にも険しい裏側があることを知るべきである。
- 「理念」という言葉を定義するのは難しいが，一つの「法則性」と考えれば良い。
- 法律は道路の交通信号みたいなもので，誰にでも通用するものでなければならない。
- 物事には中心が必要である。車も中心がなければ動かない。国家という形式の中に法律を納めなければ無国籍なものになる。
- 人間の理性は，物事の真実を見極める「探り針」である。

先生の言葉はいつも一つのアフォリズムであった。大学卒業後の進路はそれぞれ異なるものであっても，この日の参加者全員にとって先生の言葉が大きな人生の指針となっていたことは厳然たる事実であった。「知的な怖さと恥ずかしさを知れ」という言葉を心の支えにしてきた私は，この時「自分より優れた者を素直に認め，それに向かって己を鞭打たしめることも教育にとっては大切なことです」という先生の言葉を改めて思い出していた。

「先生とは大事なものを伝える仕事である」。我々教職にあるものはこの言葉を警句としなければならない。大事なものとは,「人間としての在り方生き方」を指すと言っても良いからである。

## 6　人生の知恵を継承する人であれ

3 年生諸君，卒業おめでとう。皆さんは，延岡東高校最後の卒業生として有終の美を飾るべく，3 年間立派にその責任を果たしてくれました。本校で培った「知・徳・体」すべての学習成果を礎として，志を高く，自信と誇りを持って旅立ってほしいと思います。

今年は21 世紀に入って7年年目を迎えますが，皆さんが生きていくこれからの社会は，楽観できない様々な問題を内包していると言えます。

昨年の 12 月 20 日，国立社会保障・人口問題研究所から，「日本の将来推計人口」が公表されました。2055 年までの我が国の人口変動を予測するこの調査によると，結婚しない女性の増加や晩婚化等によって少子高齢化が益々加速し，50 年後の日本の人口は 8,993 万人にまで減少すると予想されています。また，今年元旦の各新聞社説は，各社そろって，団塊世代の大量退職を意味する「07 年問題」に言及しておりました。

人口動態に関わるこうした問題は，当然のことながら，年金財政等社会保障制度に関わって深刻な影響を与えることは必至です。しかし，教育という視点から捉えた場合，私は，今まで築き上げられてきた先人たちの知恵が，今後後進の若者たちにしっかりと継承されるであろうかと懸念を抱かざるを得ないのです。さらに言えば，最近の社会荒廃の大きな原因が知恵の不継承にあるように思われてならないのです。

臨教審以来，教育の世界では個性の尊重ということがキーワードとされてきました。人間誰しもたった一度の人生です。誰からも干渉されることなく，自分の個性と能力を発揮しきって一生を全うできるほどすばらしいことはないでしょう。しかし，私たち人間は，家族を初めとする人と人とのつながりのなかでしか生きていくことのできない社会的な存在です。そこには，自己と他者との調和ということがきわめて大事なことになってきます。

ところが，何をしてもその人の自由というところにまで個が肥大した，現在の我が国においては，個性が「わがまま」と勘違いされ，いたるところで「自分さえ良ければよい」というエゴイズムが蔓延してはいないでしょうか。他人とのトラブルならまだしも，最近報道されるような，親子，兄弟姉妹，夫婦等社会の最も基礎的な構成単位である家庭内での暴力や虐待，さらに殺人事件等は，人間がいかに壊れてしまったかを示しているといっても過言ではないでしょう。一方で，自殺者の増加も由々しき現象です。

自分ひとりでは生きていけない社会的存在としての人間は，有史以来，構成員全体の生活の安全・安心を願って各種の社会規範（マナーとルール）を発達させてきました。したがって，諸々の社会規範は，人間が幸せに生きていくための知恵の総体といってよいものなのです。社会がいかに変わろうと，人間社会の幸福のためには，この知恵がしっかりと継承され続けなければなりません。

「向人口減少社会」においては，社会を構成する一人一人の個が，「知・徳・体」すべての面において強靭でなければならないと思います。ただ一度の人生に大輪の花を咲かせるために，マナーとルールを初めとする人間としての基礎基本をしっかりと継承し，逞しく生きていって欲しいと念じております。ご多幸を祈ります。（平成 19 年 3 月 1 日）

＜追記・管見＞　個性とは基礎基本の上に開花するものである。個性重視がなぜ「わがまま」と誤解され，教育現場に混乱をもたらしたのか。最大の原因は，子どもの自主性を重視する余りに，教育が最初はすべて強制に始まる，という「経験知」が見落とされてしまったからである。このことを理解するには，我が国の伝統文化を想起して見ればよい。

歴史を失った民族は滅ぶと言われる。そして，ローマ帝国の例を引くまでもなく，国家の滅亡は，外部からではなく内部における人心の荒廃の結果からもたらされることを歴史は教えている。我が国の教育の混迷の一因は，自国の歴史と伝統の中に豊饒に蓄積されてきた不易の教育理念と教育方法を軽視してきたことにあると指摘することができよう。

茶道，書道，武道等の伝統文化に象徴されるように，昔から我が国の教育では「型」(形)が重視されてきた。「型」は長年の経験を通じて蓄積されてきた知恵の集大成であり，マナーやルールなど約束事の総体である。また，「型」は，必ず基礎基本を含み，美の極致でもある。したがって，「型」を習得することは，極意へと近づく教育プログラムであった。

「型」は一方で「構え」と言い換えることができる。「構え」が心と体に支えられていることは，「心構え」「身構え」(姿勢) という言葉にも象徴されている。古来より，我が国の教育においては，心とともに体が決定的に重視されてきたことも看過されてはならない。

個性は基礎基本の上に開花すると述べたが，人間としての基礎基本である「心構え」「身構え」(姿勢)をしっかりと教えることなしに個性の開花はないと知るべきである。そして，伝統文化が教えるごとく，基礎基本の習得は，「強制」なしにはあり得ないのである。

## 7　ホスピタリティの心を忘れずに

3年生諸君，卒業おめでとう。延岡星雲高校の栄えある第1回生として入学して以来3年間，皆さんは「新しき伝説」を築くべく，後輩諸君のよき模範となり，立派にその責任を果たしてくれました。「新しき風を起こせ！」のキャッチフレーズと「志の風」「美(うるわ)しの風」「創造の風」の校訓の下に，本校で培った「知・徳・体」すべての学習成果を礎として，自信と誇りを持って勇敢に旅立ってほしいと思います。

皆さんが生きていくこれからの社会は，物心両面にわたって，相当に厳しくなることが予想されます。というのは，近年，人口を初めとして，我が国の国力を表す様々な経済指標が次第に低下してきているからです。格差社会の様相が強まっているという指摘もありますが，こうした社会現象を反映してか，一方で，人心の荒廃は止まるところを知らないかのようです。人間性の劣化というより，人間性の崩壊を意味するような陰惨な事件を伝えるマスコミ報道は連日枚挙にいとまがないほどです。かって西洋人を羨望させた，勤勉で徳性豊かな日本人は一体どこに消えてしまったのでしょうか。

しかし，皆さんは日本の未来です。決して悲観主義に陥ることなく，今こそ一人一人が日本再生の担い手としての勇気を持たなければなりません。そのためになすべきこと，私は，それは人間としての「品性」の確立だと思います。

全校集会等で幾度となく説いてきたように，イギリスの思想家サミュエル・スマイルズ

は，退廃した国家を救済する方法はただ一つ，国民の品性の回復しかない，と述べております（『品性論』，中川八洋『教育を救う保守の哲学』）。敗戦の傷跡から見事に立ち直り，高度成長を経て世界第2位の経済大国を誇った日本ですが，遺憾ながら，物質中心主義に傾くあまりに自国の伝統や文化のなかに豊かに蓄積された先人の知恵を正しく継承することを怠ってしまいました。最近では，何をしてもその人の自由とまでにエゴイズムが蔓延し，権利の主張に急なあまりに義務の放棄と責任転嫁に狂奔する情けない国に堕してしまったかに思えます。国家自体が志と誇りを喪失してしまった，と言ってもよいでしょう。

喫緊の国民的課題としての品性の回復のために，私は，巣立ちゆく皆さんに対して二つのことを求めたいと思います。まず第一は，読書です。本を読んで視野を広げ，正しい知識を身に付けて欲しいと思います。正しい知識がなければ，正しく考えることはできません。その意味で，読書は人間にとって魂の栄養ともいえるものです。

第二番目は，ホスピタリティの心を持て，ということです。ホスピタリティとは，「人を大切にする心」のことです。つながりのなかにホスピタリティがあるという鎌田實氏は，「一人では生きていけない人間という存在を，時間的にも空間的にもつないでいるもの，それはホスピタリティです。一人では生きていけないからこそ，他者を大切にするこころ，つまりホスピタリティが必要になっているのです」と述べています。また氏は，「幸福だから笑うのではない。むしろ笑うから幸福なのだ」という，フランスの哲学者アランの言葉を引き，「笑みを広げよう」と呼びかけています（『超ホスピタリティ』）。私は，「ありがとう」と他人に感謝する心こそがホスピタリティにつながると思います。

皆さんの輝かしき未来のために，“GO AHEAD WITH A SMILE!”（笑顔で前進！）

心よりご多幸を祈ります。（平成20年3月1日）

＜追記・管見＞　2011年3月11日に発生した，1000年に一度とも言われる東日本大震災では，「絆」という言葉が注目を浴びた。この人間同士の「絆」も，人を大切にするという「ホスピタリティ」の心を前提にしていると言っていい。大切な人を亡くし，家屋を流され，職業さえ失っても，黙々と頑張り続ける被災者の方々の姿は，我が国民だけでなく全世界の人々に深い感動を与えた。復興にはまだまだ多くの時間を必要とするかも知れないが，この未曾有の大震災は，多くの人々に人間としての在り方生き方を考えさせる契機となったことは確かである。地震や津波だけでなく，台風による風水害等もあり，私たちのこの国土は，災害列島ともいえる地形を持っていることも，教育が無視してはならないことの一つであろう。だからこそ，そこで大切なものは「ホスピタリティの心」なのである。

## 8　おわりに

東京都杉並区の区長として，教育にも数々の実績を上げられた山田宏氏は，かって文明評論家としても活躍された歴史学者の会田雄次氏が，勤務する京都大学の学生に対して，次のように話されたことを紹介している。昭和30年代のことである。

「君たちが大人になる時代が一番心配である。なぜなら君たちには三つの大きな教育がなされていない。それは，宗教心，道徳，歴史だ。この三つの教育がまったく欠けていて，大人になったときには浮き草のような，恐ろしい社会になっているだろう」。

山田氏は会田氏の話を次のように解説する。ここに宗教心とは，特定の宗教ではなく，自分より偉大なものを通じて自分を見る力であり，道徳とは，常識的に人間生活の中に存在している善悪の基準である。道徳については，特に最も大事にしなければならない「公（おおやけ）」に対して，人はどうするべきかが教えられていない。また，歴史とは，日本という国に生まれたことに感謝し，先人たちの努力を引き継いでいこうと思えるような教育である，と（『「日本よい国」構想』）。

昭和30年代といえば，1955年から1964年の10年間で，2012年の現在からいえば半世紀も前のことである。しかし，会田氏の由々しき憂いは見事に的中してはいないだろうか。

自分より偉大なものを通じて自分を見る力としての宗教心とは，有限なる存在としての人間存在を自覚することであるから，この意味での宗教心が備わっていれば，エゴイスティックな自己主張に狂奔することなく，人間はもっと謙虚であるはずである。日常の人間生活の中に常識的な善悪の基準が確固として存在していれば，人間はもっとストレスから解放され，いじめなどに走ることなく，穏やかな生活をおくることができるはずである。また，日本という国に生まれたことに感謝し，先人の叡智に学び，それを引き継いでいこうと思えるような歴史教育がなされていれば，国民はもっと自信と誇りを持つことができるはずである。私たち教育者は，会田氏の予言のように，この国がこれ以上「浮き草のような，恐ろしい社会」になっていくのを拱手傍観するわけにはいかない。

今この国に最も欠けているのは，責任ということである。何事も先延ばしされ，責任をとるものがいない。それは高い見識の下に，覚悟を持ち，使命感を抱いて事に臨んでいないからである。子どもたちは日本の未来である。大人たちは，「個性」や「自主性」の美名の下に，決して子どもたちを見捨ててはならない。自分の身の回りから，自分にできる範囲で，当たり前のことを当たり前にやりきる努力を続けなければならないのである。

ある先哲は，「理念は，この世に存在して儚く滅びていくという貢税を，自分では支払わずに，個人の情熱に支払わせるのである」と述べている。何事も，確固とした結果を出すためには個人の情熱に待つしかない。自己の責任を凛として引き受ける教育者の覚悟と使命感なしには，教育の再生は不可能であろう。言葉の感化力を信じて，熱き情熱の炎を燃やして「魂」を磨き，強靭な第一歩を踏み出さなければならないときが来ている。もう時間はあまりないのかもしれないのだから。（了）